

審査の結果の要旨

氏名 松山 秀明

本論文は戦後東京を「テレビ都市」と捉え、テレビと東京の相互作用的な成立過程を明らかにしようとしたものである。東京におけるテレビ産業の形成と、テレビによる東京そのものの再編とを関連づけて考察すると同時に、これまでNHKや民放で放送されてきた膨大な数のテレビ番組（ドキュメンタリー、ドラマ、バラエティ）のアーカイブを分析し、その東京像の変遷を考察することによって、「テレビによる東京」「東京のなかのテレビ」「テレビのなかの東京」という3つの視点から、「テレビ都市」としての戦後東京の形成と変容の過程を総合的に明らかにしていく。

本論文は全4章（序論と結語を除く）から構成されている。

序論では、「戦後首都学」から「東京空間論」へといたるこれまでの東京論の系譜、また都市とメディアに関する従来の研究を批判的に検討した上で、戦後東京を「テレビ都市」として読み解くという本論文の問題意識が示される。その上で、その分析枠組として、メディア技術によって人々の都市経験がどのように変容してきたのかを問う「テレビによる東京」、都市空間のなかで産業としてのテレビがどのように配置されてきたのかを問う「東京のなかのテレビ」、テレビ番組のなかで東京がどのように描かれてきたのかを問う「テレビのなかの東京」という3つの円環的な視点が提示される。

第1章「〈東京〉の措定—1950年代～60年代」では、テレビが急速に普及し、「テレビ都市」としての戦後東京の基本構造が形成されていく過程が論じられる。この時期には、皇太子成婚パレードや東京オリンピックの開催に合わせて、東京を中心とするテレビ・ネットワークが全国的に整備された。東京の都市空間には、東京タワーや放送局が次々に建設され、それ自体が東京の近代化を推進していった。テレビ番組のなかでも、近代都市として発展していく東京のイメージが盛んに描かれ、東京への憧憬を作り出していった。こうしてテレビと東京が互いに作用し合いながら「テレビ都市」の原型を形作っていく過程が明らかにされる。

第2章「〈東京〉の喪失—1970年代～80年代前半」では、東京一極集中への

懸念が次第に高まり、「テレビ都市」としての東京が変容していく過程が描き出される。産業的には、1960年代後半から70年代初頭にかけて、第2次大量免許交付により地方局が大量に開局した。1980年代になると「地方の時代」が謳われ、ローカルジャーナリズムへの期待が高まっていった。またテレビ番組でも、近代化に対する反発・反省から、近代都市・東京への批判や、紀行ドキュメンタリーの隆盛、ホームドラマにおける脱東京の動きが加速していったことが述べられる。

第3章「〈東京〉の自作自演—1980年代後半～90年代」では、こうした状況が再び反転し、「テレビ都市」としての東京の構造転換が進んでいく過程が論じられる。この時期には、フジテレビの臨海副都心（お台場）移転に象徴されるように、規制緩和・民間活力導入による東京の再開発においてテレビが重要な役割を果たしていった。テレビ番組のなかでも、恋愛や消費に戯れる物語の舞台として、あるいは情報化・国際化した最先端の世界都市として、ドラマやドキュメンタリーで東京のイメージが作り出されていった。ウンベルト・エーコの言うネオテレビ化した現代のテレビによって、東京が現代都市へと変貌を遂げていく様子が描き出される。

第4章「〈東京〉の残影—2000年代～10年代」では、「テレビ都市」としての東京の終焉について論じられる。この時期には、インターネットやソーシャルメディアの普及によってテレビ不信が強まっていった。新しい電波塔（東京スカイツリー）の建設や2020年東京オリンピック招致が歴史的に反復される一方で、貧困や格差の顕在化も進んだ。テレビ番組のなかでも、東京は恋愛や消費の舞台として機能しなくなり、都市のなかの格差が盛んに描かれるようになっていった。テレビは東京への憧憬を作り出すメディアではなくなり、「テレビ都市」としての東京が終焉を迎えつつあることが結論づけられる。

以上のように、本論文は戦後東京をテレビから読み解くという独創的な視点から、「テレビ都市」としての戦後東京の形成と変容の過程を総合的に明らかにした。審査委員会では、都市を文学から読み解いた前田愛の先行研究としての位置づけが不明瞭であること、分析枠組の一つである「テレビによる東京」や副題となっている「遠視法」という概念についてさらなる理論的検討が必要なことなどが指摘されたが、都市論、放送産業論、表象論を学際的に接続し、東京とテレビの相互作用的な関係を明らかにした本論文の独創性は、都市論（史）、テレビ研究の双方において高く評価される。よって本論文は博士（学際情報学）の学位請求論文として合格と認められる。